

再びわれらが誇れる緑友の後輩 テナー 小林

緑友の後輩三浦文彰は昨年2度、今年に入っすでに2度聴いている。これも追っかけに近いといっいいくらいだ。昨年の2度は共に辻井伸行との共演だった。1度目は5月14日、サントリーホールでロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニーをバックに、三浦文彰はヴォーン・ウィリアムの「あげひばり」を、辻井伸行はグリーグのピアノ協奏曲を演奏した。辻井伸行の追っかけのはじまりだった。2度目は10月6日のサントリーホールでのガラ・コンサート。これは最初の「われらが誇れる緑友の後輩」で詳しく紹介した。

さて、今年に入っ、1月13日、サントリーホールで日本フィルハーモニー交響楽団の名曲コンサートの前半で、三浦文彰は若手のヨナタン・ローゼマンとブラームスのヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲イ短調を演奏した。ブラームスはチェロ協奏曲を書いていないが、この3楽章からなる二重協奏曲は、全ての楽章で独奏楽器はチェロから(2楽章はヴァイオリンと同時に)始まりヴァイオリンが追随する、どちらかといえはチェロ主導の曲である。これは、モーツァルトのヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲とは対照的である。モーツァルトの場合、明らかにヴァイオリンが主導し、ヴィオラは比較的地味にヴァイオリンを支える。いずれにしても、ブラームスとモーツァルトのこの二つの二重協奏曲は、弦の全ての協奏曲の中でも際立って燦然と輝いている名曲である。

第1楽章は短い管弦楽のあとチェロが力強い響きでカデンツァ風に登場する。第2楽章はブラームスお得意のホルンで始まり、管楽器がこだまのように応答しヴァイオリンとチェロが続く得もいわれぬ美しい楽章だ。第3楽章はテンポの速いヴィヴァーチェでヴァイオリンとチェロの掛け合いと重奏があり、どちらにとっても難曲である。この早いパッセージを無事通過した23歳の若いチェロ奏者が思わず“うまくいった”と言わんばかりに同意を求めるように笑みを浮かべて三浦の方を見やると、26歳、兄貴分の三浦も“うんうん”と頷くようにして若い走者を労うような表情を浮かべた。三浦文彰26歳にしてすでに貫禄十分である。

今年の2回目は2月9日、オーチャードホールで東京フィルハーモニーと共演した。プログラムは、バッハのブランデンブルク協奏曲、バッハのヴァイオリ

ン協奏曲第3番、ブラームスのヴァイオリン協奏曲だ。この3曲全てに三浦文彰が登場する。まずブランデンブルク協奏曲では、ヴァイオリン3、ヴィオラ3、チェロ3に通奏低音を受けもつコントラバス1挺からなる。この曲を弦楽四重奏風に三浦の呼吸に合わせて合奏する。

バッハのヴァイオリン協奏曲は、最もよく演奏される(昨年12月12日にもヒラリー・ハーンが演奏した)第1番と第2番は、ヴァイオリンのために書かれたが、バッハはこれを後にチェンバロ協奏曲に編曲している。この第3番は逆にチェンバロ協奏曲からオリジナル独奏楽器と考えられているヴァイオリン協奏曲へ復元されたものである。この曲を三浦は颯爽と引き振りした。

さすがにブラームスのヴァイオリン協奏曲は弾き振りというわけにはいかない。史上最年少でNHK交響楽団のコンサートマスターになり、今は独立して演奏や指揮をも手掛けている徳永二男が指揮をした。このブラームスの協奏曲はベートーヴェン、メンデルスゾーン、チャイコフスキーと合わせて4大ヴァイオリン協奏曲と称される名曲だ。40分にわたる大曲であり難曲である。それを貫禄十分に引き切り、大先輩徳永が、見事と言わんばかりに三浦の肩を抱いて名演奏を讃える姿はとても感動的だった。

三浦文彰、26歳、われらが誇れる緑友の後輩はこれからさらにどんな高みへと上り詰めていくのであろうか。